

明日が雨でも晴れでも（完結）

miwaku_d

目次

- 第1話 別世界の住人
- 第2話-1 下校
- 第2話-2 憂鬱
- 第2話-3 夕立
- 第3話-1 キーホルダー
- 第3話-2 夏子
- 第3話-3 麻奈
- 第3話-4 三谷野
- 第4話-1 捜査
- 第4話-2 捨てられなかったもの
- 第4話-3 5月のこと
- 第4話-4 くま
- 第5話-1 反省
- 第5話-2 知らなかったこと
- 第6話-1 見送り
- 第6話-2 待ち合わせ
- 第6話-3 おととい
- 第6話-4 花火

監修を務めさせていただく藤井です。よろしくお願ひします。
ララノコン特別賞の受賞、おめでとうございます。

これからインプレスより発売される電子書籍用の監修について、部分的な指摘をこのPDFに書き込んでいます。
「明日が雨でも晴れでも」は、二人の（あえてこう書かせていただきます）障害を持つ人物が、その障害を乗り越えて繋がる話です。典型的とも読めるストーリーラインでありながら、叙情性に満ちた独特のリズムの文章で、現在の状態でも、とくに連載の状態であれば十分読める作品となっています。感服いたしました。
ですが、一本の書籍としてみたときには二人の持つ障害が明かされる場面があまりに遅く、物語の都合によって運命を背負わされているかのように感じられてしまいます。
これを突破するための方法として、序盤より、さらなる叙情性で読者を引き込んでいくことを勧めたいと考えています。二人の抱える障害が、光と湿度という詩的な事物で表現できるのですから、これを使わない手はありません。

また、細かな部分で、視点についての指摘、文章のリズムに関する指摘も行います。

これらの指摘はすべてが提案です。
特別賞を受賞された力のあるmiwaku_dさんの判断で、取り入れるかどうか決めてください。

それでは、よろしくお願いいたします。

第1話 別世界の住人

鼻の奥でツンとする、消毒液の臭いがした。

いい導入ですね
独特の読点の位置が、何かを予感させます。

重たいまぶたを開けると、白。天井と布製のパーティション。床に横になっている。よくよく見知った保健室だと瞬時に判断し、嘆息した。

次ページにもすぐ「嘆息」があります。いずれも文末で重複していますので、どちらかを書き換えることを勧めます。

ゆっくりと上半身を起こした途端にくらくらして、はいだばかりの掛け布団に掴まった。珍しいことではなかったのですが、倒れたらしい、と理解するのに時間はかからなかった。ただ、意識を失ったのは久しぶりだ。

今日の日差しはあまりに強くて、強敵だった。

ここもいい。強敵だった、という一見不自然な表現が素敵です。

ぼんやりとパーティションの布を見つめ、いたら、鮮やかな緑の葉をわざわざつけた大きな桜の木のことを思い出した。近所の河川敷の土手に生えている、大きな日影を地面に落とすたくて立派な大木。そう、学校帰りに、行こうと思って

逸子のもつ障害を印象づける、光と日差しがどうだったのか、それにたいして無意識にどう反応したのかを、冒頭で差し込むことを強く勧めます。
中盤で決定的に明かされることですが、それがどのようなことなのか、miwaku_dさんの叙情的な表現で、冒頭から逸子の肉体を通して描くことで、明かされる病気の残酷さがより際立つことでしょう。
僭越ながら、私が書くとなると以下のような内容になります。

例）窓から斜めに差し込むまばゆい日差しから、思わず顔を背けてしまう。

どうにも、詩的になりません……。ともかく冒頭から、日差しと光と、湿度が逸子と武に与える小さな影響を薄く水彩絵の具のように重ねていくことで「明日が雨でも晴れでも」は、物語がもともと持っている、障害を越えて出会う二人という構図を鮮烈に描き出すことができると考えます。

「くらくら〜掴まった」では、まるで掛け布団に体重を預けたかのように読めてしまいます。ここでとれる行動としては、握りしめた、倒れ込んだ、手をついたなどがスムーズに感じます。

個人的な感覚かもしれませんが「〜いたら」という持続していた行動に対して「思い出した」という瞬間的な表現は似つかわしくないと感じます。
進行している、始まった意味を持つ「思い出す」がこの場合はいいのではないのでしょうか。

前ページで指摘した重複です。

いたんだった。一人でぼうっとするには最適な、お気に入りの日影。今日は無理そうだなと小さく嘆息する。

グラウンドからか、野球部のものらしきかけ声が聞こえてきた。今、何時だろう。徐々に眩暈が治まり顔を上げると、パーティションの向こうで動く人影に気づいた。保健の中原先生だろう。あの、とそろそろと声をかけた。

「気がついた？」
保健室にある、ついたてのようなパーティションは「開き」はしないと思われます。

勢いよくパーティションを開き、声にならない悲鳴を上げた。覗いた小麦色の顔は、中原先生ではなかった。

三谷野武。さすがにここは「。」がいいです。

うちの中学でその名前を知らない奴は、転校してきて一日目とか、そういう事情でもないかぎりいないだろう。というか、断言する、知らない奴はいない。
異なる対象を示す、同じ単語がダブっています。

何もしていなくても、そこにいるだけで目立つ奴だった。見た目が派手だとか、そういうわけじゃない。オーラ、なんていうと大げさだけど、嫌でも目につく、いることを意識させられてしまう、存在感のかたまり。

この「、」ちょっと多く感じます。
一年中日に焼けた肌色をしていて、休み時間は必ず片膝を立てて机の上に座り、クラスの男子たちを従える様子はまるでサル山のボスだった。そんなサル山を遠巻きに見ている女子の中にも、きっかけさえあれば三谷野としゃべりたいと思っている子が少なからずいた。去年のパレンタインダーはまさに三谷野の一人勝ちだったという。

男女問わず人気のある三谷野を、現在のような状態にいたらしめている最たる理由が、その頓着と遠慮のなさだった。自分がボスであることを自覚していながらも、それを鼻にかけることはなく、かといってしごく当然のように顔をした。女子にモテることですら、そうだけとそれが何か？と言わんばかりの顔をしてみたりする。ほかの奴がやったらカチンときそうなところだが、それを感じさせないだけのあつけらかんとした部分がまた、三谷野の魅力の一つであるらしかった。

加えて、そのキャラクターだけでなく、三谷野はポテンシャルもなかなか高かった。運動神経抜群のサッカー少年で成績もそこそこ優秀。その一方で年中学校をサボり、他校の不良とつるんでいるという黒い噂も絶えない。ファンの子に言わせれば、「そのミステリアスな部分がたまらない」。

そんな三谷野の通り名は『万年晴れ男』。三谷野が学校をサボると雨が降るとの噂はあまりに有名だ。

……と、前置きが長くなった。つまりは、こういう三谷野なので。

日影に近いところに存在している私と、同じクラスに属しているという以外の接点などあるはずもなく。別世界の住人である彼が保健室で私の目の前にいる理由が皆目理解できない。

サッカー部の練習を抜け出してきたのか、汗染みのついた紺色のユニフォーム姿だ。口を開けたまま言葉も出ない私に、三谷野は白い歯をのぞかせて笑みを向けた。

「水でも飲む？　ここにコップあるからさ」

「眩暈が治まり」という言い回しが、流れの中で堅く感じます。視点がぶれているというほどではありませんが、自分の症状を客観的に見ていた観察者から、顔を上げる行動者への切り替えがスムーズでないように感じました。
「眩暈」を肉体的な感覚として描くといいたのではないかと思います。

三谷野が登場するまでのあいだに、主人公の性別がはっきりとわかる述懐が一つは欲しいと思いました。髪の毛の処理でもなんでもいいのですが、……。イラストが入れば迷うことはないのですが、どうしても男性の読者は一人称の小説の主人公が男性だと思いこんでしまうのです。

ペアの文で、両方共に「顔をする」という終わり方になっていることが気になります。態度などの言い換えがあると、大変よく似た二つのことに少しの温度差が加わって三谷野の人物を立体的にしてくれるでしょう。

miwaku_dさんの、このような文章がいいですね。

三谷野の清潔感がだいなしです。汗染みは黄色いシミを思い起こさせます。汗でまだらに色が変わった、ぐらいにしておくことを勧めます。

臭いは、どうしても臭気を連想させます。「匂い」「香り」など、もう少し清潔感のある単語を選ぶことをお勧めします。

「あるう」という推測に「理解できた」という内心が重なっています。視点人物がの推測は意識に浮かび上がるだけで「理解した」「わかった」ことになります。このお話においては、そのような文を可能な場所では省略し、読者に補わせ、逸子の内心に読者を引き込むことの方が大切な気がします。上手いので普通に読めている間は気にならないのですが、このような部分がいくつか見受けられます。

ここまで「眩暈」でした。個人的にこの作品ではひらがなか「目眩」が似つかわしいとは思いますが、いずれにせよ、語句の統一は必要です。

文の前後を入れ替えた方がいいと感じます。「サッカー部、戻っていいよ。よくあることだし、もう大丈夫だから」直前で礼を述べ、逸子のターンが終わってもおかしくないところに「よくあることだし」が続いているため、三谷野の発言かと混乱しました。

言葉に反し、というほど逸子が上位の立場でもないような気がします。無視し、ぐらいではないでしょうか。

背を向けた三谷野を、ちょっと待って、と止めた。

「中原先生は？」

「先生はなんか電話がかかって来とかで職員室。江藤のことは俺が見てるから遠慮なくて言っておいた」

なんで三谷野が私の看病を申し出る？ 訊こうと思ったその瞬間、くらくとした。眩暈。

ベッドに再び倒れるかと思った。が、予想に反して体は何かに支えられた。

健康そうな汗の臭いが漂う。顔を上げると、三谷野の手が私の肩を支えていた。ぎょっとして体を引いて、結局ベッドに倒れ込んだ。ごめん、と三谷野は頬を掻いた。

掛け布団を頭までかぶって、働きの鈍くなっている脳味噌で考える。

何？ 何これ？

取り巻きの子たちなら鼻血を出しそうなくらいのシチュエーションで**あるうことは理解できた**。が、ろくに話したこともない上に、三谷野のことをボスザルとしか思っていない私にしてみれば、混乱以外の感情など発生しようがなく。

そっと、布団から目元を出した。途端に三谷野と目が合ってた布団をかぶった。

「あのさ」

三谷野は私の疑問に答えてくれた。

「江藤が倒れてたの、俺がここまで運んできたんだ」

ようやく現状を認識でき、混乱がおさまった。なんだ、と息を吐き出し、掛け布団から顔を出した。ゆっくりと上半身を起こしてみた。**目眩**は起きなかった。

何はともあれ、ありがとうと礼を述べる。

「よくあることだし、もう大丈夫だから。サッカー部、戻っていいよ」

三谷野は私の**言葉に反し**、近くのパイプ椅子を引き寄せてどかっと座った。

「心配だから先生が戻ってくるまでここにいる」

本格的に居座るつもりらしいその様子に、にわかに不安になった。

疑問から、回答までの距離がちょっと遠く感じます。この間にある動作をアクションと捉えてコンパクトに詰めると、ぐっと距離を詰めてくる感じと相まって、いい転換点になります。

寝ている逸子を見ているのですから、見下ろしている状態で視線は合っているのではないのでしょうか。「顔を上げ」のような覚悟を決める動作として、見下ろした状態のできる他の動作に置き換える必要があると思います。

実際に頭をかきむしったのですから（第二話）、「～サルのごとく」ではなく、「かきむしった三谷野は」のようにすると長い修飾文がすっきりとまとまります。

「三谷野がここにいる理由なんてないじゃん」

それから、心の中で付け加える。そんなところにいられても、気まずいだけだし。

一刻も早く出ていってくれないかと内心ため息をつきつきその顔を見たら、三谷野はなぜか真剣な面持ちになっていた。

ずっと立ち上がり、理由ならあるよ、なんて私を見下ろす。私が知っているボスザルのものとは異なるその表情にほんの少しドキリとしたものの、不信任感が勝った。自分でもわかりすぎるくらいに眉根が寄る。すると、今まで威勢がよかったのが嘘のように、あのさ、ともどもごしてから、三谷野は意を決したように顔を上げた。

「体調が悪くなければいいんだけど。あさつての夏祭り、俺と一緒にいかない？」

学校と駅の間地点にある、稲浜神社の夏祭り。たくさんの出店が並び、小規模な花火まで打ち上がるこの辺りではわりと大きなそのお祭りに、男子と一緒にいく。それには、大きな意味があった。

稲浜神社のお祭りに行くと、カップルが成立する。

まあ、一緒に祭りに行こうとどちらかが誘い、承諾した時点でカップルが成立したに等しいのだけど。恋愛成就を売りにしている稲浜神社にあやかったそんな話は、うちの中学では常識中の常識、鉄板である。稲浜神社の祭りに一緒に行くということは、つまりはそういう意味だということ。

「.....からかってる？」

と返す以外、どう返せと。三谷野くんとお祭りに行けてきゃー嬉しいー、なんて喜び騒ぐ理由は私にはないぞ。

少しむっとしたように、三谷野は自分の顔を指差した。

「これが冗談言ってる顔に見える？」

いつもにここにお調子者の三谷野が少しくらいむっとしたところで、万年楽しそうな表情が変わるわけもない。黙って首肯すると、ウキーと頭をかきむしるサルのごとく三谷野はほえた。

「なんで？ 俺、すんげーがんばって言ったのになんでそーなる？」

わめいた三谷野の声が頭に響いて顔をしかめた。そんな私に気づき、三谷野はごめんっ、と大人しくなった。

「とにかく、嘘でも冗談でもないんだって」

わけがわからないし、頭痛もあいまって段々とイライラしてきた。

「嘘でも冗談でもなかったらなんなの？ 罰ゲーム？」

不要？



ある程度の速度で読んでいると、地の文に差し込んだセリフをどちらが言っているのかわかりにくい部分があります。三谷野が連続して話すここは、特に気になる部分です。

「」の中に入れてしまっていると思います。

「だから、そーゆーんじゃないって」

どーしてわからないかなあ。三谷野は困ったようにぼりぼりと頬をかいた。

「俺、江藤のこと好きだ」

第2話-1 下校



オレ、エトウノコトガスキナンダ。

その台詞をそのまま頭の中で反芻しても、一文字ずつ分解してみても、カタカナに変換してみても、まったくもって意味

miwaku_dさんの持ち味にも感じる、読点で短く切った文は心情表現にとても適しているのですが、中原先生が入ってきたことで三谷野が詰めた距離と、それに緊張する逸子の意識は冷静なものになっているはずです。（助かった、かもしれませんが）そのような空気の違いを出すために、ここはあえて普通の文章にはいかがでしょう。例）そんな私と三谷野を見比べた中原先生は、変なことしてないでしょうねと三谷野の肩を叩いた。口をへの字に曲げた三谷野は、するわけねーだろ！と頬を膨らます。ほんの少しですが、このように異なる文をちりばめるのは効果があると思います。

「は」は入れた方がいいです。するにはいたらなかった

ここで、夕暮れに対する逸子の病気からくるいつもの自然な反応が欲しいところです。ほっとする、影になっていることを確認する……。伏線として機能するようにさりげなく書かれていると、日光を気にしていた主人公のやるせない状況が際立ちます。

が入ってこなかった。ぽかんとしている私と、あーっとまたもや頭をかきむしっている三谷野。

なんだこの構図は。なんなんだ。

わずかな沈黙のあと。がらがらっとドアが開く音がそんな空気をやぶり、今度こそ中原先生が顔を出した。大柄な中原先生は、トレードマークのポニーテールを揺らしながらずんずん和大股で歩く。

「江藤さん、もう起きたの？」

「の声」はあつたほうがいい。人柄が明るいのであれば、「いつもからつと明るい」のようにすると鮮明になります。

からつと明るい中原先生は、小さく頷いて布団を引き寄せた。そんな私と三谷野を見比べ、中原先生はからかうように、

変なことしてないでしょね、と三谷野の肩をぼしんと叩いた。するわけねーだろ！ 三谷野は口をへの字に曲げる。

「ショック症状もあるかもしれないけど、主に貧血かなあ」

地の文が一つ、欲しいところです。段落ごとの行間が大きく設定されたこの作品では「」で始まるセクションのジャンプがわかりにくいのです。

三谷野をパーティションの外に追い出し、中原先生はそう診断した。先生は私のおでこにそっと触れる。まだヒリヒリしているおでこに、先生のさらっとした冷たい手のひらは心地よい。症状もまだあるし、落ち着くまで休んでいってね。

先生！ 小麦色の手が、パーティションの上でびよこびよこしている。まだ保健室にいたのか、と小さく舌打ちする。

「俺、部活の練習が終わったら、江藤を家まで送っていきます！」

なっ。突然の申し出に声を上げた。いらない！ そんなのいらない！

「せっかくだし、送ってもらったら？ ご両親、お仕事で今すぐ迎えに来るのは難しいんでしょう？」

頭痛と共に頭を抱えた。反論できる材料がない。

何がなんでも、サッカー部の練習が終わるまでに復活して一人で下校してやる。

と意気込んだものの、完全回復するにいたらなかった。ベッドからのそっと起き上がった頃には窓の外は橙色に染まっていて、下校時刻を知らせる校内放送が流れている。カラスと一緒に帰りましょう。

そっとパーティションから顔を出した。直後、するするっとドアが開き、満面の笑みの三谷野が顔をのぞかせた。

「ナースタイミング！」

どこがじゃ、と突っ込む元気ももはや湧かず、大きなため息をついた。結局、三谷野を従えるように保健室を出る羽目になった。

下校時刻を回った校舎は、部活動の片づけをしている生徒でにぎやかだった。着替えるために教室に戻っていく生徒に、ぞろぞろと下駄箱に向かっている生徒。その流れに混ざって昇降口に行き、スニーカーに履き替えていたら。夏子一、と声をかけられた。トランペットのケースを抱えた、小学校時代からの友人だった。

「今帰り？」

訊かれて頷いた。さっきまで保健室にいたから。

「また？ 大丈夫なの？」

「もう全然。今から片づけ？」

「そうそう。今日はパート練習だったから」

この文、初読の時には、逸子が実際に発した声だとは思いませんでした。独り言、述懐が極めて多い主人公なので、対話していないかのように感じられてしまいます。「」が続くのがいやな部分では、せめて以下のようにすることを勧めます。

例) 訊かれて、さっきまで保健室にいたから、と頷いた。

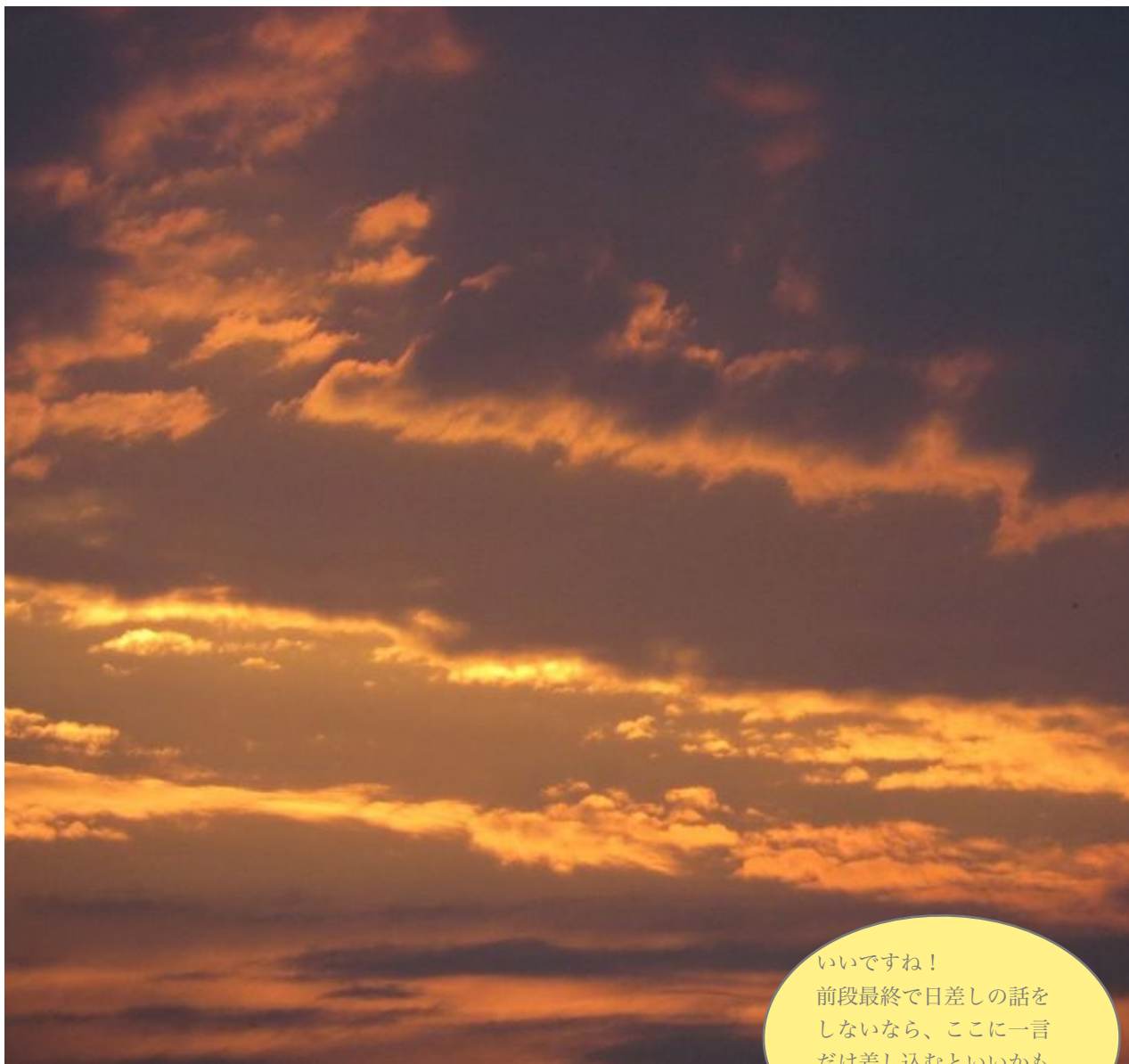
じゃあね。音楽室へ向かう友人に手を振った。その後ろ姿を見送り、上履きを下駄箱に突っ込んで顔を上げると、先にスニーカーに履き替えた三谷野がガラス扉にもたれて私を待っていた。ポケットに両手を突っ込んだ三谷野の視線とかち合う。

何か言いたげな視線から目を逸らし、三谷野の前を素通りして黒い日傘を開いた。

第2話-2 憂鬱

文から省略されている逸子の「視線」が素通りするのですが、文の冒頭に三谷野の「何か言いたげな視線」が入っているので収まりが悪くなっています。また、文の後半では既に「目を逸らし」た後なので、その後で視線が「素通り」する

「黒い日傘を開いた」はとても印象的な言葉です。文の末尾にくっついているのがちょっと、いや、かなりもったいない。独立した段落にして、日差しから身を遮った逸子がほっとする、そして日光のような熱を振りまく三谷野との距離をどうしていいのか迷う。そんな感覚を、ネタバレにならないギリギリのところで表現してみてはいかがでしょうか。話の末尾ですから詩的な表現なら十分に許容されると考えます。



いいですね！
前段最終で日差しを
しないなら、ここに一言
だけ差し込むといいかも
しません。

外はむわっとしていて、熱を持った空気はべたべたと肌にまとわりつく。

明日は終業式。夏休みはすぐそこだという事実、ずっと重たかった気分は少しだけ軽くなり、そしてすぐにもとの重さに戻った。どうせ、家から出ることなんてほとんどないまま夏は終わっていく。夏休みは嫌いじゃないけど、別に休みが夏じゃなくてもいいと思う。秋休みとかさ。

校舎をぐるりと回って裏門から出て、坂の多い住宅街を歩いた。三谷野は黙ってついてくる。私よりも十センチ以上背が高い三谷野は、当然ながら脚も長いはずで。普通に歩いたら、どうやったって一歩前に行くはずなのに、不自然なくらい歩調が遅い。仕方ないので私はもつと遅く足を動かすのだけれど、三谷野はさらに歩みを遅くする。

「無理して合わせてくれなくてもいいんだけど」

「遅く」がかぶっています。最後の三谷野は「歩調を合わせてくる」などに言い換えたほうがいいかもしれません。

学校を出るまではきれいな夕焼けだったのに、東の空から厚い雲が広がっていて、なんとなく街は薄暗かった。街頭にぽつぽつと白い明りが灯り始める。

街灯

情景描写→二人の状態→二人の関係と流れていた描写が一転、情景描写に戻ってしまっています。

読者の頭ではハイアングルのカメラ→後ろからのロングショット→バーストショットと動いているのに、突然街の絵が登場している。

どうしてもここに夕焼けを入れたければ、バーストショットの背景を意識して、逸子のアクション、心理と共に描写するといいでしょう。

例) 振り返り、はっとした。学校を出る前は綺麗な夕焼けだったのに、三谷野の後ろには、東の空から広がった厚い雲が覆い被さっていた～

「俺は無理はしない主義だ」

こっちがどんなに突き放しても、三谷野は普段と変わらない明るさで返してくる。こういう奴だからしょうがないと諦めればよいのか、どういふつもりなんだとイライラすればよいのか。三谷野のことを知らなすぎて、判断できない。

「さっきさ。」唐突に、三谷野が切り出す。昇降口で話してたのって、隣のクラスの<ruby>花村<rt>はなむら</rt></ruby>だよな？
「さ」「き」と似た文字が続くので読みにくい書き出しです。
—（ダッシュ）を使う文体なら、「さっき——と三谷野が切り出す」とできますが、本作品では他の方法でこの書き出しを読みやすくする必要がありますと思います。
「同じクラスになったことないのに、接点なんてあるの？」

「なんでそんなこと三谷野が知ってるの？」 三谷野は答える代わりに、してやったりと言わんばかりにニッと笑んだ。訊かなきゃよかった。
直前のセリフで十分伝わっています。不要だと思います。

「小学生の頃に、吹奏楽部で一緒だったの」 このセリフ、一瞬だけですが三谷野のものだと思ってしまいます。前の文に逸子が「これ以上～」というニュアンスで言葉を押し出すような文が欲しい。

これ以上訊いてくれるな、という空気をかもしつつもだった。なのに、三谷野は空気を読まない。

「なんで中学では吹奏楽続けなかったの？」

「ほらほら、こういうこと訊いてくるんだ、コイツは。」

三谷野の態度を二度に分ける必要はないのではないのでしょうか。前段が逸子の予感ならば、そうわかるようにしておく必要を感じます。

別にいいじゃん。ぼそっと答えた私に、三谷野はなおも喰い下がる。別にいいなら話しても別にいいじゃん。なんだかんだで私は疲れていたし、そんな三谷野をいなすのはとても面倒で。

「うちの学校の吹奏楽部、マーチングがメインだから」

読者に明かされていない障害があきらめさせたことを、さらに三谷野にも話したくないという二重の難しさがあり、スムーズに読みにくい。「面倒で。」の後ろに少しだけ余韻が欲しいところ。

マーチングというのは、楽器を演奏しながら、行進をしたりフォーメーションを組んだりするパフォーマンスのことだ。遊園地などでも、兵隊のようなびしっとした格好をした楽団が、ぴしっと揃った行進や踊りをしながらかっよく演奏していることがある。炎天下で楽器を持って行進なんて、できるわけがない。やれるものならやってみたいけどさ、なんて負け惜しみみたいなことは、絶対に口にしないけど。

口にしない

ふいに、三谷野が足を止めた。町内掲示板をじっと見ている。でかでかと貼られた、稲浜神社の祭りのポスター。

「さっきの返事、訊いてないんだけど」

人に嫌な話をさせておいて、そっちは無視かい。と思ったら今度こそイラッとした。何の？ とにらむ。

「お祭りに、誘ったつもりだったんだけど」

「無視かい」で既に「イラッ」とした表現に読めます。もう一段階後ろでのテンションを高めるか、一つの文にまとめてしまうことを勧めます。

やっぱり、訊き返さなきゃよかった。

「出店回ったりとかさ、してみたいなあなんて」

絶対楽しいと思うんだ。なんて、三谷野は目をきらきらさせる。私の気持ちなんて一切無視して『絶対楽しい』だなんて

断言できる三谷野の神経が信じられない。イライラを通り越して呆れてしまう。

「絶対」に断言のニュアンスは含まれています。特に詩的な表現でもないのに、言える、でもいいと思います。
「からかうのもいい加減にしてよ。ろくに話したこともないのに」

三谷野は後頭部の髪をくしゃっと掴んで、決まり悪そうに横目で私を見る。まあ、それはそうなんだけど。

「話したことなかったら、お祭りに誘っちゃいけないわけ？」

最後の文が三谷野のセリフに感じにくいので、
文中に入れた方がいい気がします。

例) ～掴んで、まあ、それはそうなんだけど、と決まり～
そうじゃないけど、と言いかけたが、口をつぐんだ。くどくど説明する必要なんてないくらい明確なことだ。

そんな私の気持ちを見透かしたように、三谷野は言葉を続ける。

「だから、冗談でもなんでもないんだって。俺はずっと、似た者同士かなって思って、逸子のことを見てたんだ」

そのときだった。ぽつと頬に生ぬるいものが当たった。

第2話-3 夕立



雨だ。

三谷野のセリフですね。逸子の内心でもおかしくない書き方で、次の文でようやく実際に発した言葉であることがわかります。後戻りさせて効果的な場面もあるのですが、シーンの読み出しになる部分では、スムーズな誘導が好ましいと感じます。

呆けたように空を見上げ、三谷野が呟いた。私も同じように天を仰ぐ。

いつの間にか、灰色の雲が空を覆っていた。

雨粒を落とす曇天をぼうっと見ていたら、視界が暗くなった。広げた濃紺の折りたたみ傘を、三谷野が私に差し出している。

「貸すよ」

傘の柄に手を伸ばさないでいると、いいから、と無理やり押しつけられた。私の家近くだし、日傘もあるから。そう返そうとしたが、遠慮は御無用、と三谷野は武士のような口調になって両手で制す。雨粒はみるみるうちに大きくなって、三谷野のワイシャツに染みを広げていく。

前もありましたが、ネガティブに捉えられがちな「染み」を、今後好きになる相手の描写に用いるのは好ましくありません。

ビジュアルで表現し、読者に委ねる方がいいと思います。

「俺んち、走れば五分かからないから」

「まだらに濡らしていく」「雨のしずくがところどころで色を変えていく」など。

三谷野は近くの高層マンションの名前を挙げた。その真向いの古い家が俺んち。

「つつーことで、雨も降ってきたし、俺はいったん退散するわ。祭りに行くかどうかは、明日訊くからな！」

今日はゆっくり休めよ！ 三谷野は最後にそう言い残し、ぱたぱたと走って行ってしまった。

ぼつんと取り残され、去っていく三谷野を見送った。雨音が急に大きくなったような気がした。騒がしい三谷野がいなくなったからだろうかとも思ったが、それ以上に雨の勢いがどんどん強くなってきた。うなる腹の虫のような雷も聞こえてくる。
ここから、すばらしい。
雨を（おそらく仕方なく）好む逸子の心情が、第二話の最後、「冗談じゃない」と結ばれる流れは逸子の心の動きを最もよく表すプロットポイントになります。ここから、第二話の終わりまで、もう一息だけ滑らかにつなぎましょう。

押しつけられた傘を足元に下ろして畳んだ。無理やり渡された傘を使うのはしゃくだったし、それに、太陽を隠す雨は嫌いじゃない。大した距離でもないし。畳んだ傘を手にしたまま、日傘で雨のカーテンを突き破るように走った。ほてった手足を正面から叩くぬるい雨は気持ちよい。

なだらかな坂の途中にある一軒家が我が家だ。玄関の軒下に到着し、すっかり重くなった日傘を畳んで大きく一息ついた。足元に三谷野の傘を置いてドアを開ける。

玄関の時計を見ると、もうすぐお母さんが帰ってくる時間だった。面倒で、電気もつけず暗い廊下をぺたぺたと歩き、タオルを取りに洗面所に向かう。濡れた靴下が廊下に点々と足跡を残していた。

乾いたタオルで前髪を拭いていたら、ふうっとため息が漏れた。ちょっとだけ、しんどい。病み上がりで走ったのはよくなかった。

湿ったタオルで顔を覆って、三谷野のことを思い出す。

キーになる段落の中間を、もうすこし滑らかに。

三谷野は私のことを、夏子って呼ばなかった。

タオルをかぶったまま自室に戻った。別に、いいんだけどさ。濡れた制服を脱ぎながら誰にともなく呟いてみたりする。そんなことは別に、いいんだけど。

誰かに告白されて嬉しいとかそういう気持ちが一パーセントもないなんていったら嘘になるけど。残りの九十九パーセントを占めるのはイライラだった。

似た者同士だなんて、冗談じゃない。

第3話-1 キーホルダー



雨は明け方には上がったが、雲は厚いまだだった。普通の感覚だと、待ちに待った夏休みを前にテンションが上がりきらない、なんてところかもしれない。

光の描写がほんの少し、逸子の心情がほんの一言だけ欲しいところですよ。

昨日はイライラしたりぐるぐる考えたりで、なかなか寝つけなかった。あくびをかみ殺しつつとろとろと歩いていたら。昨日も通った町内掲示板の近くにあるマンションの駐輪場の軒下に、何か

くまのキーホルダー。

後友人のものだとわかるアイテムを、あたかも逸子が知らないモノであるかのような「何か」という単語で表してしまったことがアンフェアさを醸し出してしまっています。

例) ～軒下に、転がっているものをみつけて～

手のひらサイズ、身長十センチにも満たない焦げ茶色の木でできたくまだった。つるんとした丸い顔には、黒い点の目とUの字に笑んだ口が描かれ、ぴょこつと半月型の耳が飛び出ている。顔と同じくらい丸々とした体は黄緑色の洋服を着ていて、揃った太い足は赤いブーツを履いていた。見たところ大した汚れもなく綺麗そうだった。段差のある軒下にあったので、昨晩の雨にも打たれなかったらしい。

「何見てんの？」

「綺麗そう」も、逸子の知らない物体であるかのように見える文です。心を殺して淡々と描写する、がいいと思います。

背後からかけられた唐突な言葉に、うわつと声を上げた。ぱつと振り返ると、そこにはなぜか驚いた顔で一步あとずさった三谷野が立っていた。

「どうして～」が逸子の発した声なら、「急に振り返ったから～」は成立しますが、内心の声ならば三谷野の反応は逸子の心の声を読んだかのようなのです。本作は「」を使わない発話が多いので、丁寧に処理することを勧めます。

どうして三谷野が驚く？

不審感いっぱいの私に、いやあ、と三谷野は驚きが抜けない表情で頭をかいた。急に振り返ったから、その。なんだか歯切れが悪いのが気になったが、昨日のことを思い出してむかつ腹が立った。ふいつと顔を背け、そのまま歩きだす。

「これ、拾わなくていいの？」

無視、しようかとも思ったけど。ゆっくりと振り返る。三谷野が、くまのキーホルダーを指さしている。

「私のじゃないし」

「いた」がいいですね。

「でも、すごく気になっているように見えたよ」

そんなこと、と言いかけて口をつぐんだ。私と三谷野の間を、勢いよく自転車が走り抜け、湿った風が吹いた。アリの観察をする小学生のようにしゃがみこんで、三谷野はじっと転がっているキーホルダーを見つめている。

「これ、足の裏にシリアル番号書いてあるよ」

「ああ、そう」

このくだり、いいですね。

「誰かの大事なものかもしれない」

「ああ、そう」

「拾ってあげたら？」

って、なんでそんなこと、三谷野に言われなきゃいけないんだ。

「大事なものなら、ここに置いておいた方が探しやすく持ち主も嬉しいんじゃない？」

でも。立ち上がった三谷野は、真面目な顔になってずいっと前に出た。

「ここは駐輪場だぞ？ 自転車にひかれてノラ猫にかじられて拳銃の果てに転がって車にひかれるかもしれないぞ。それでも、逸子はこのかわいそうなキーホルダーをここに置いていくのか？」

……なに、この、捨て犬を拾わないのを責められているような空気は。

「じゃあ、三谷野が拾えばいいじゃない」

「きっとこのくまは、逸子に拾われた方が嬉しいと思う」

なんだそれ。というか、勝手に名前で呼ぶな！

ごめんなさい、ここから手描きの線になります。

「ともかく、ちゃんと拾っておけよ！」

ちょっと！ 引きとめる間もなく、三谷野は学校とは逆方向に走り去ってしまった。

「もう……なんなのよ！」

思わず声を上げてから、はっとして周囲を見た。気がつけば、辺りは登校中の生徒でにぎやかになっていて、その視線を集めてしまっていた。かっとな顔が熱くなって、キーホルダーを掴んで逃げだした。

あいつ、一体なんなのよ！

リフレイン間の距離が短いので、しつこく感じてしまいます。中間にある分をもう一行分だけ増やしましょう。

第3話-2 夏子



教室の光が欲しい。厚い雲を通して差し込む鈍い光。逸子を安心させる、そしてその安心に気づくことで自分の境遇を改めて思い知らされる光の描写が欲しい。このパートの書き出しで、太陽の光が描かれることは重要です。

教室に着くなり、いつも一緒に行動しているグループの子に声をかけられた。

「夏子、昨日も倒れたんだって？」

いつもどこで情報を仕入れてくるのか不思議でならない。もう平気だから、と軽く流しながら席に着く。大変だよねー、

紫外線アレルギーなんて。いかにも他人事といったその台詞に、いつものごとく内心突っ込む。

ほっとけ。

逸子が本作で背負っている宿命が初めて明かされます。

ここは段落を分けてもいいのではないのでしょうか。

先週にも、似たようなことがあったのを思い出す。

炎天下の水泳の授業を休み、私は一人教室で自習をしていた。が、その日は朝から肌が焼けるようなものすごくいい天気
で、教室にいても絶不調だった。途中で自習は諦め、机に突っ伏して眠ることにした。そうして授業時間が終わって、わら
わらと塩素の臭いをまとった友人たちが教室に戻ってきた。

大丈夫？ 心配そうに私の顔をのぞきこんでいる友人に気づき、机から起き上がった。大丈夫、大丈夫。そう笑った私
に、大変だよねえ、と友人たちは口々に同情の言葉を述べていく。ドラマとか好きなアイドルの話とか、そういう話をする

分には、彼女たちは申し分ないんだけど。

← ダブリというほどではないのですが、「申し訳」ないと読み違いがちな「申し分」ないが近くにあるので
とった方がいいと思います。なくても意味は通りますし、すっきりします。
友人たちの言葉を右から左に流していたそのときだった。

ざっと視界を何か白いものが横切った。湿っぽい無地のタオルが、目の前にいた友人の頭にかぶさっていた。

――わっぴい！

まったくもって悪いと思ってなさそうに拝んだのは三谷野だった。手元が滑ってさー。けたけたと笑う三谷野に、何すん
のよー、と友人は口では嫌そうにしつつも、どこか楽しげにタオルを投げ返し、わいわいと別の話題に移行した。

三谷野にしてみれば意図したことじゃなかったろうし、もう覚えてはいないだろうけど。あのとき、面倒な会話を遮って
くれた三谷野にちょっとだけ感謝したのだった。

膝の上に抱えたままの通学バッグのポケットを見た。三谷野に言われるがままに拾ってしまった、くまのキーホルダーが
突っ込んである。

これ、どうしたらいいんだろ。

← この言い方では逸子にとって、未知のモノのようです。「どうし
う」が適切に感じます。

頬づえをついて、小さくため息をついた。こんな私とは対照的に、クラスメイトたちは来たるべく夏休みに思いをはせて
いるのか、誰もかれもが明るい表情をしている。彼らには憂鬱の種がない。

小学生の頃、私は夏になると、紫外線よけのためにふちの大きな麦わら帽子をかぶらされていた。

いっちゃんが麦わら帽子をかぶると夏がくる。

誰かがそう言ったおかげで、それまで『いっちゃん』だった私のあだ名は『夏子』に変わった。夏なんて大嫌いだった私
が、みんなの夏の風物詩の一つになった瞬間だ。小学校を卒業して中学生になって、麦わら帽子をやめて日傘にしても、私
は『夏子』のままだった。

始業時間を知らせるチャイムが校舎中に鳴り響く。みんながぱたぱたと自分の席に戻ると同時に、担任の先生が教室に入
ってきた。

朝のホームルームが終わり、廊下に出て体育館に移動すべく整列した。終業式だ。友人たちとおしゃべりをしつつ、誰もいない教室を廊下からちらとのぞく。制服を着て朝の街をうろついていたくせに、三谷野は教室に現れなかった。

雨だ。

前にも三谷野との間で同じパターンがありました。セリフか、逸子の内心かわからない書き方です。ゆらりとして面白いのですが、雑魚キャラに使うのはもったいないですよ。

廊下の窓から外を見ていた男子が、昨日の三谷野のようにぼつり、**呟いた**。灰色の雲が見えたが、私の位置からは窓越しの雨粒は見えなかった。**三谷野が学校サボってるからじゃね？** 別の誰かがそう返したのが聞こえた。

ここは文中のセリフが素敵なんです。このような流れは大切に。

第3話-3 麻奈



終業式はぼうっとしているうちに終わった。

校長先生の話も、学年主任の先生の話も、冬休みや春休み前のときとほとんど同じような感じで、教室に戻ったら何一つ頭に残っていなかった。柔らかく、さらさらと降りだした雨のせいで体育館の空気がひどく湿気を帯び、床や窓が結露でび

ひらがなが続きすぎているので、ここには読点が欲しいところ。
「らくさらさら」には「さくら」が入っていて、誤読しやすい流れです。

文の真ん中に入っている「ような」が意図を曇らせているかもしれません。私の固い分で書くならば、
例)普段は気の強さを象徴している目尻の上がつた大きな目が、今はせわしく揺れていた。
となるでしょう。

ったりと濡れていたことだけが強く印象に残った。外で嗅ぐ雨の匂いは嫌いじゃないけど、人が多い体育館では雑多な臭いが混ざりすぎて、空気は重く少し息苦しい。

この切り替えがいいですね！

通知表の返却があって、一喜一憂の空気の中、帰りのホームルームになった。

この止め方では、逸子が声をかけられたのかと一瞬思ってしまいます。

笹原さん、と先生に声をかけられ、笹原麻奈が教壇の前に立った。途端に教室の喧騒がボリュームダウンする。

天然のふわつとした茶髪のショートヘアに手ぐしを入れ、麻奈はなんだか気まずそうに立っている。気の強さを象徴するような目じりの上がつた大きな目が、せわしく右往左往していた。

セリフと地の文の切れ目がわかりにくいです。

先生に促され、麻奈は前を向いて口を開いた。仲良くしてくれて、ありがとうございました。誰よりもおしゃべりが好きで、ずばずばと遠慮なく物を言う麻奈にしては、月並みな挨拶だった。大阪に来ることがあったら連絡ください。そんな言葉で締めて、べこんと頭を下げる。始めはばらばらと、最後は教室から溢れるような拍手。

クラス委員長の女の子が、みんなからのメッセージが書かれた色紙を麻奈に手渡した。ありがとう、と麻奈は照れたようにそれを受け取る。ピンク、緑、青と色とりどりのペンでメッセージとイラストが書かれた正方形の色紙を、麻奈は両手で抱え、もう一度頭を下げた。

『大阪でも元気でね』

麻奈の左手のちょうど下あたりに、自分が書いたそんなメッセージがあった。短すぎて、空白がたくさんできてしまった。行間を読む、なんて言葉があったりするけど、私のメッセージからは何も読めないに違いない。

それでは、事故のない楽しい夏休みを。そんな先生の一言で、一学期は終了した。麻奈ちゃん、とクラスの女子たちが、ピンクや黄色の花が散ったカラフルな封筒の手紙を持って次々と麻奈の机を囲んだ。中には饅頭代わりのプレゼントを持っている子もいて、ありがとー、と感極まった様子の麻奈の声が響いた。絶対に大事にするからっ！

この空気の中でそそくさと教室を出るのはためらわれ、私は自席に座ったままそれを遠巻きに眺めていた。が、それすらも気まずくて視線を逸らした。三谷野の机が目についた。

視線という、タイトな視界を感じさせる言葉のあとに、全体の中で浮いたものを見つける「目についた」は跳躍気味に感じます。ここは、逸子の内心に肉迫している大事な部分ですので、動いた視線が三谷野の空っぽの席で止まるところまで、丁寧に書いた方がいいと思います。

一学期最後の日。三谷野は結局、学校には来なかった。

第3話-4 三谷野



校舎を出ると雨はあがっていたけれど、重く厚い雲が垂れこめていた。部活動がある子たちは、弁当持参でまだ学校に残っている。夏休みを迎えて明るい空気の漂う校舎を出て、まっすぐに裏門へ向かった。

「よ」

せつかくなので、対比しましょう。今のままでは、ちぐはぐな雰囲気が一文に混在して感じられます。

裏門の石柱に、三谷野がもたれていた。朝に会ったままの制服姿で手ぶらだ。終業式をサボって何をやっていたんだろう。

「あのキーホルダー、ちゃんと拾った？」

返事をするのがしゃくで、無言で通学バッグのポケットからそれを取り出して三谷野に突き出した。

これは、無言ではないですし、結果的に返事になっています。セリフ、カットしてもいいんじゃないでしょうか。

「三谷野が持っていればいいじゃない」

「なあ、そのキーホルダーの持ち主、一緒に探さない？」

なんで！？ 思わず声を上げ、慌てて自分の口を塞いだ。近くにいた生徒たちの好奇の視線が突き刺さる。逃げるように

フェンスの方に移動して抗議した。

「なんで、私がそんなことしなきゃいけないの!？」

「いいじゃん。それとも、何か予定でもあるの？」

そりゃ、予定の一つや二つくらい。そう指を折ってから、なんだかむなしくなった。

「『キーホルダーの持ち主と一緒に探す』、なんてわけのわかんないことをしたくないっていうのは、断る理由にならないの？」

何それ! 超傷つくー。三谷野はメソメソと泣き真似を始める。ああ、なんでこう、うっとうしい。

「とにかく! 私は帰るから!」

三谷野の泣き真似がびたっと止まった。じっと私の顔をのぞき込むように見下ろしている。それから、いいの? なんてにんまりと笑みを浮かべた。

「俺、実は昨日、見ちゃったんだけど」

三谷野はとてつもないいたずらを企んでいるような顔だ。嫌な予感が出て、おそろおそろ訊き返す。何を?

「昨日、日傘をささないで外に出ただろ？」

曇みかけるように三谷野は続けた。

「普段だったら絶対に日傘をさして外に出るのに、昨日はわざと日傘をささないで昇降口から出た。それで、ぶっ倒れた。俺が保健室に運んだ」

網膜を焼くような凶暴な日差しに視界が一瞬で真っ白になって、傾いた盆の上に立ったように足元がぐらっとして、遊園地のティーカップをぐるんと思い切り回したように世界が回転するあの感覚を思い出した。体が重力に負けた瞬間、私はいつだって思うんだ。

また負けた、って。

キッと三谷野をにらみ返した。

「何か証拠でもあるの？」

ない。三谷野はきっぱりと言い切った。

「でも、逸子がそういうことしてるって、中原先生に言うこともできる。したら、家にも連絡行っちゃうかもな」

人物の造形に深く関わる部分ですので書こうかどうか迷いましたが、書きます。一連の狡猾な三谷野の振る舞いが、いままで、そしてこれから逸子が惹かれていく三谷野と異なる人物に見えてしまいます。逸子の心の動きは素晴らしいのですが、それが三谷野の口車に一对一で対応している必要はないのではないのでしょうか。三谷野にここで不器用さが見え、その不自然な言動に逸子が強く反発する。そして真相の告白、三谷野の心情を知ると流れが美しい気がします。

Good!

何。なんなの。震えそうな両手のこぶしをぎゅっと握った。

「し、信じらんない！ 脅そうっていうわけ？」

「ただ、俺はこのキーホルダーの主を探したいなと」

にらんだ。込められるだけの力を持って、三谷野をにらんだ。が、そこはボスザル、三谷野はにんまりしたままでひるむ様子など微塵もなく。

ああもう、と右のかかとで地面を蹴った。

「家に帰って、着替えてお昼ごはん食べてくる。それから待ち合わせ。これでいい？」

三谷野はぱあっと表情を明るくした。OK、OK！

ぶんと首を振る、の方がいいかもしれません。このパートは逸子が強ければ強いほどいい場所です。

「じゃ、中央公園で待ってるから」

ふわっと風に舞うように、三谷野は軽やかに駆けていく。三谷野の背中を見送って、昨日と同じように立ちつくす。

遠くからどこかの運動部のかけ声が聞こえてきて、すぐに静かになった。また取り残されたような感覚に陥り、ぶんぶんと首を振る。台風が去って、飛ばされてきた枯葉やゴミでとっちらかった道端に一人残されたような気分になってしまった。凶悪なまでに強力な三谷野の存在感にやられた気がして、心の中で地団太を踏んだ。

第4話-1 捜査



駅から徒歩五分ほどのところにある、ブランコや砂場のある児童公園。通称『中央公園』と呼ばれるそこに行くと、三谷野は制服姿のままベンチに座っていた。私に気づき、小さく手を振る。

「家に帰ってないの？ お昼は？」

「それを聞いた三谷野は」ぐら
いは入れましょう。ここで文中
のセリフと続く主語が分離して
いるのは混乱します。

昼はその辺で適当に食べたから。ぽんっと立ち上がり、三谷野はズボンを静かにはたいた。それから、じっと私を上から下まで観察した。

「何？」

思わず自分の格好を見た。黄色いTシャツにデニム地のロングスカートと、革ひものサンダル。特段気合いも何も入っていない私服だ。にらむように見返すと、三谷野はなんでもないと視線を逸らす。私服が珍しかっただけ。

ここも、三谷野のセリフに読みづらいところです。

「それより、キーホルダーは？」

ここは難しい部分ですね。三谷野の背中が気になった逸子の内心にも読めてしまいます。洋服を指差したところで三谷野のセリフだとわかればいいですが、消去法的にしかわからない人も多いと思います。

せつかく肉体が近づいている瞬間ですので、「その首筋から」など入れるとドキッとしますよ。

促され、肩から下げていたトートバッグから取り出した。三谷野がぐっと顔を近づけてきてそれを凝視する。いつも駆け回っていて汗臭そうだと思っていたのに、冷たく混じりけのない雨のような匂いがして、ぎよっとする前に困惑した。

「背中」の言はほしいところ...

背中。私の動揺など知ったこっちゃない三谷野は、くまの洋服を指差した。緑色の四葉のクローバーと、黒字で『clover』という単語がプリントされている。

知ったことではないかどうかは、三谷野にしかわかりません。「～こっちゃない風の」としてはいかがでしょう。

「これ、売ってるお店の名前かもよ」

文中セリフも、ここは全く気にならないどころか、素晴らしいのです。

心当たりない？ 訊かれて、少し考えた。陸橋の近くに、同じ名前の雑貨屋さんがある。それから、三谷野はくまの右足のブーツの裏も指さす。四けたの数字。シリアル番号なら、店の人に訊いたら何かわかるかもよ。

ということで、早速その店に移動することになった。店の場所がわからないというので、私が先を歩く。なんでもう、二日続けて三谷野を従えることになっちゃったんだろう。

。で切ってもいいと思います

雨は午前中に降って以来やんだまま、アスファルトはわずかに湿り気を帯びていて、灰色がいつもより濃いように思える。四車線の国道は車通りがまばらで、昼下がりの住宅街は静かなものだった。街路樹の鮮やかな緑の葉には水滴がたまり、光の加減で時折きらきらと輝いた。

も(?)

ここ、と私は足を止めた。国道沿いの、上階がマンションになっているビルの一階。ショーウィンドウにキルト地の人形やビーズのアクセサリがきらきらと並ぶ、小さな雑貨店だった。白い木製の扉の上には、『輸入雑貨 clover』という丸い文字の看板が掲げられている。店があるのは知っていたが、私も中には入ったことがなかった。

ショーウィンドウ越しにそっと店内をのぞく。アイボリーの壁紙の店内は明るく、暖かな雰囲気だった。木製の棚に並べられた大小のぬいぐるみや、テーブルクロスなどの布製品が見える。客はおらず、三十代くらいの女性店員がレジで何やらノートを広げていた。

「じゃあ、聞き込みを頼んだ」

「私が？」

そりゃそうだよ。三谷野は両手を腰に当て、偉そうに私を見下ろした。俺がこんなに可愛い店に、入れるわけがなからう。

外で待っているという三谷野を残し、しぶしぶ店の扉を開けた。よく利いた冷房に肌の表面がひんやりし、同時にふんわりとした花の匂いに包まれる。いらっしゃいませー、という明るい声に迎えられた。女性店員がレジからにこにこ私のことを見ている。何かを買うわけじゃないし、気まずい。

振り返ると、ガラス扉越しに三谷野と目が合った。がんばれ言わんばかりに、白い歯を見せてにと笑い、親指を立てている。

ああ、もう。

レジに進み、訊きたいことがあるんですけど、とトートバッグの中から例のキーホルダーを取り出してレジ台の上に置いた。

「これって、この店で売っていたものですか？」

あら懐かしい。人懐こそうな笑顔のまま、店員さんは白い手でそっとキーホルダーに触れた。

「去年売っていたものね。うちの店では二つしか入荷していなかったかな」
仕入れ商品名は "clover" のプリント①

そうなんですか。領いてから、ここから何を訊こうと考え込んでしまう。すると、店員さんはおしゃべり好きなのか、なおも話し続けた。

「あなたぐらいの女の子が二つ買っていったの。この店で二つしか売ってないって教えたら、すごく嬉しそうな顔したからなんだかよく覚えてて。近くの中学校のセーラー服を着ていたかな。これ、その子からもらったの？」

第4話-2 捨てられなかったもの



店に入ったのは逸子だけですので。
店を出た私と三谷野は、雑貨屋さんからほど近い小さな公園に移動した。小学生のグループが駆け回っていてにぎやかだ。鉄柵に腰かけ、店員に訊いたままを三谷野に伝える。

「落としたのは、うちの中学の女子か」

三谷野はそう繰り返し、考え込んだ。私はペットボトルのお茶を飲みながら、そんな三谷野を眺める。

「これ以上、手がかりなんてないと思うよ。それに、明日から夏休みだし、探すのなんて絶対に無理だよ。本気で持ち主に返したいなら、先生に頼んで学校の掲示板に貼ってもらえばいいんじゃない？」

歩き回ったからか、さっきから汗が止まらなかった。太陽が出ていなくても、やっぱり夏だ。暑くてしょうがない。

タオルで汗とペットボトルの周囲についた水滴を拭いていたら、三谷野の視線に気がついた。私とは対照的に、よく日に焼けていて、そのくせ汗一つかいていない。その顔が、なんだか思いつめたような、冗談や軽口が通じなさそうな真剣なものに変わっていた。

「何？」
不要①

「本気でそう思ってるの？」

本気じゃなかったらなんなのさ。鉄柵から降りて、じゃりっと砂を踏みしめる。

「三谷野こそ、なんでこんなことでムキになってるの？」

答えない三谷野に、忘れていたいら立ちがふつふつと輪郭を取り戻す。

「からかうのもいい加減にしてよ」

別に、怖くなんかないんだから。言ってから、そうだそうだ、と自分の中の自分が加勢した。別に、告げ口されるのなんて怖くない。言いたければ、中原先生にでもなんにでも言ったらいいんだ。

三谷野が呼びとめる声があったような気がしたけど、振り返らずに、そのまま自宅まで走った。

ばんつと勢いよく玄関のドアを開けて帰宅した。何事かとお母さんが廊下に顔を出したが、そのまま二階まで駆け上がって自分の部屋に駆け込んだ。

閉め切っていた部屋は空気がこもっていて、ただでさえたらたらと流れていた汗の勢いが増した。なんだよ。無性に悔しくなっ、目頭が熱くなった。

なんだよ、ちくしょう。

部屋のすみには、見た目以上に大きくて、教科書だけでなく体操着を入れてもばんばんにならない機能性十分のブルーの通学バッグが転がっている。その内側には大小のポケットがあり、そのファスナーの一つにくまのキーホルダーがついていた。木製で、顔が丸くて、薄黄緑色の服を着ていて、裏にシリアルナンバーが刻まれた赤いブーツを履いたくま。とつと外して、机の奥にでもしまっておけば――違う、麻奈みたいにどこかに捨てちゃえばよかったんだ。

肩にかけていたトートバッグを、通学バッグとは反対側の部屋のすみに置いた。トートバッグに入れたままだったキーホルダーを、三谷野に渡さなかったことを後悔する。

通学バッグとトートバッグのはざままで、汗を流しながら立ちつくす。

壁掛け時計の秒針が、ち、ち、ち、と正確に時を刻んだ。分厚い遮光カーテンの隙間から差し込む光はあまり強くなく、部屋は家具の輪郭がぼやける程度に薄暗い。

この単語のせいで、読者に告白を始めてせっかく寄り添えるようになった逸子が一気に遠く感じてしまいます。

このまま溶けてしまえたら楽なのに、なんて考えてみて自嘲した。部屋の中は静かなくせに、自分の中はなんてうるさくうっとうしいんだ。イライラしてしょうがない。落ちていたキーホルダーも、三谷野もなにかも。三谷野が私のことを夏

「そもそも、この文が要らないかもしれません。」



子ではなく逸子と呼んだことも、私をますます苛立たせた。私のことを夏子と呼ばないのは、笹原麻奈だけだったのに。

麻奈は違う小学校の出身で、中学一年生の時に同じクラスになった。私がみなに『夏子』と呼ばれているのを、麻奈は心底不思議に思っただけ。さして仲良くもなかったのに、ある日唐突にその理由を訊かれた。

——みんな、私を見ると夏が来たって思うんだって。

なんでえ？ 麻奈は大きな目をくりくりさせた。意味わかんない。

——逸子って、夏子っていうよりは秋子か冬子って感じじゃん。夏だーってテンション上げるタイプじゃなさそうだし、もっと陰鬱な感じだと思うけど。

あとから考えれば、『陰鬱な感じ』だなんて真っ向から言われたのはどうかと思っただけ。そんなことは気にならなかった。『夏子』なんてあだ名が似合っていないという事実に共感してくれる人もいるんだという驚きの方が勝った。

正面から人に『陰鬱』などと言うようなデリカシーのなさはあるものの、思ったことを臆することなく口にする麻奈はさすがだった。麻奈は、誰かの噂や多数派の意見に流されることなどけっしてなかった。みなが私のことを『夏子』と呼んでも、麻奈だけは『逸子』と呼んだ。それだけで十分だった。麻奈だけは、私のことをわかってくれていると思っていた。

なのに。

その場にしゃがんで引き寄せた通学バッグから、くまのキーホルダーを外した。

——はっぴーばーすでーい、逸子！

去年の誕生日に、麻奈がくれたものだった。

これ、あたしとお揃いなんだ。番号も一つ違いでさ。

それを捨てたのは麻奈だ。私は結局外せないで、バッグの内側につけていたのに。鼻腔の奥がつんとして、あと思ったときには涙がこぼれた。三谷野に持ち主を探せなんて言われたのも、屈辱以外の何物でもなかった。

手にしたくまを、トートバッグの中に突っ込んだ。取り出したハンカチで汗と涙を拭いながら、私は部屋を飛び出した。

朝通学中に発見したのですから、外せないのも無理はないです。「結局」という判断を行ったかのような書き方のために、時間感覚が物語中での経過時間と変わって感じます。三谷野と一緒に動いている時間も多いため、逸子はどうしてもいまいちかわからずにそのままにしておいた、判断を保留したのではないのでしょうか。

第4話-3 5月のこと

ばたばたと家を出ると、向かいの電柱に三谷野がもたれていた。

「どこ行くの？」

答えなかった。背筋を伸ばして、三谷野の前を早足で横切る。

怒ってるの？ 何かまずいことしたなら謝るよ。そんな三谷野の台詞が追いかけてきたが、無視してずんずんと歩く。

角を一つ曲がって、二つ曲がって。そのよくしゃべる口を閉じはしたが、三谷野はまだついてきている。背後霊のようについてこられるのは、これから行こうとしている場所を考えたらあまりにうっとうしい。

立ち止まり、くると後ろを向いた。

「ついてこないでくれる？」

三谷野は沈んだように視線を落とした。

「ごめん。怒らせるつもりじゃなかったんだ」

ふんつと鼻で笑う。じゃあなんのつもりだったの？ なんて、訊いてやるもんか。

「私がこれ以上怒る前に消えてよ！」

迷惑なの！ 思わず声を荒げてから、三谷野の顔を見て口をつぐんだ。三谷野の顔色は悪いなんてもんじゃなかった。青いというか、血が通っていないかのような白さになっている。

体調が悪いのかと思っていたら、聞いたこともない消え入りそうな声が返ってきた。

消えるから。

三谷野はゆっくりと顔を上げた。

「町内掲示板のところに、行ってくれないかな。逸子が――江藤が、今から行こうとしている場所に行く前に」

なんで？ 訊いても、三谷野は答えなかった。

「そこに行ってくれるなら、俺、消えるから」

どうして三谷野にそんなこと命令されなきゃいけないんだ、とは思ったが。自分を見る三谷野の視線はあまりに真剣で、射すくめられてしまうような、あらがいがたい力を持っている。

三谷野から視線を逸らし、きびすを返した。

追いつき、ちらりと見た三谷野の顔は、心底ほっとしたような、でも何かを諦めたような寂しいものになっていた。

ハ
ニ
ニ
、
目
取
高
で
す
よ
！
・

回想に入る前に、一言だけ。逸子の意識を麻奈に切り替えるための文が欲しいところです。
「麻奈——」だけでもいいので切れ目が欲しい。
この後のシーンはとても素敵なのです。読み返して回想だ、とわからせるのがもったいない。
一気に読んでもらうために、シーンの切れ目を明確にしましょう。

今年の五月のことだった。放課後、アレルギー科の病院に行くためにそそくさと教室を出た私は、体操着袋を忘れたことに気づいて教室に引き返した。

——夏子もさー、ほんとに大変だね。

聞き慣れたクラスメイトの声が聞こえてきて、私は廊下で足を止めた。

——ねー、体育の授業もダメだし、普通に出かけるのにも一苦労だし。

ドアの小窓から中をのぞいた。いつもお弁当を一緒に食べている女の子たち三人と、麻奈がいた。

彼女たちが悪意のもとでそういう話をしているんじゃないってことは承知していたので腹が立つなんてことはなかったし、彼女たちは私がいなくてもこういう話をしているんだな、という感想しか持たなかった。麻奈がその話に加わっていなかったことも、私を寛容にさせていた。



とはいえ、廊下で自分の話を盗み聞いたような格好になってしまったのはあまりよろしくない。体操着袋を取りに来ただ

けなのに、どうしよう。何も聞いてない顔で、しれっと入ってしまえばよいのか。

廊下の柱の影に隠れ、ぐるぐると考えた。考えていたら、じゃーね、という声が出て、麻奈が廊下に出てきてしまった。

あ。二人して顔を見合わせ、間抜けな声を出した。そんな必要なんてなかったのに、私は麻奈に背を向けて逃げだしていた。ちょっと！ と麻奈が追いかけてくる。体育の授業は半分以上見学の私と、現役陸上部員の麻奈とでは、足の速さは比較にもならない。あっという間に追いつかれ、昇降口の手前で制服の裾を掴まれた。

気にすることないって。麻奈は軽く上がった息を整え、私に笑みを向けた。

――あの子たちも、悪気はないんだし。

麻奈とは違ってぜえぜえと息を切らせていた私は、なぜだろう、そのとき、無性に腹が立ったのだ。あの子たちが私のことを話していたのを知ったときには立たなかったのに。麻奈のその台詞を聞いた瞬間、全身の血がかっと熱くなった。

制服を掴んだ麻奈の手を振り払った。

――同情なんてしないでよ。

麻奈の顔色が変わったことに気づいたときには、遅かった。

――私が、いつ同情なんてした？

麻奈の導火線が短いことは重々承知していたはずだった。なのに、そのことを考慮する前に、言葉が口から飛び出していた。

――ずっとしてたじゃない！

麻奈は怒った顔で私を見つめ、そして口元にだけ笑みを浮かべた。ははっと笑って、そっぴゃあ、と一人うんうんと頷く。

――健康優良児のあたしには、夏子さんのことなんてなんにもわからないしねえ。

麻奈はそのままくりと私に背を向け、大腿で教室の方向に戻って行った。私はそんな麻奈に背を向けた。

あれ以来、麻奈とは話していなかったのに。

第4話-4 くま



町内掲示板の見える通りまで来た私は、足を止めた。

見たこともない思い詰めたような表情で、植え込みをかき分けている麻奈がいた。

麻奈の方でも私に気づいて顔を上げた。驚いたように眉を上げ、そして、視線を逸らす。

「何やってるの？」

逸子ちゃん、相手の感情を決めつけすぎ
ですー。

距離を空けたまま、少し声を張り上げて訊いた。今声をかけなかったら、一生言葉を交わせないような気がした。なのに、語尾は消え入りそうなくらい小さくなってしまった。

視線をゆっくりと私に戻した麻奈は、ほんの少し口をぱくつかせた。が、再び視線を伏せ、ぼそっと何かを呟いた。聞こえなかった。

沈黙が下りてくる。視線を伏せたまま、でも意をけつしたように麻奈が再び口を開いた。

「落し物を探してたんだ」

でも、見つからなくて。麻奈は植え込みを見下ろした。この辺だと思うのに。

そろそろと麻奈の隣まで歩いた。中腰のまま、麻奈は私を見上げる。私はその目の前に、トートバッグから取り出したくまのキーホルダーをかかげた。

「今朝、この近くで拾った」

麻奈は、そっと私からくまを受け取った。そして、ブーツの裏のシリアルナンバーを確認する。

あたしのくまだ、信じられない、と麻奈は呟いた。それから、ぎゅっと私の両手を掴んだ。

「ありがとう、逸子！　あたし、これ落としちゃって、昨日からずっと探してて」

頬を上気させて、麻奈は何度もありがとうを繰り返した。そんな反応、私は予想だにもしていなかったわけで。

「もしかして、ずっと探してたの？」

麻奈は両手でくまを抱き、こくと頷いた。

「これがなかったら——あたし、逸子にちゃんと謝れない気がしてて」

私は嫌な奴だった。拾ったくまともらったくまを、併せて麻奈につっかえしてやろうと思っていた。お揃いだったくまを、麻奈が捨てたと考えた。そんな風にしか考えられなかった。なのに。

涙腺がわずかに熱を帯びた。つくづく自分が嫌になる。

この文は不要なほど、今までの積み上げで伝わってきています。消してもいいですよ。

私——。言いかけた私を、麻奈は制した。もういいんだ、と麻奈は笑う。

「あのとき、あたし、みんなと同じだって言われた気がして、すごく腹が立ったんだ。あたしのこと、なんだと思ってるんだって」

ごめんね。麻奈はそう顔を歪め、さっと目元を擦ってもう一度謝った。ごめんね。そんな麻奈に、ぶんぶんと首を振った。途端に目頭が熱くなる。

「私こそごめん」

麻奈だけは、私のこと、『夏子』って呼ばないでいてくれたのに。

言っているそばから鼻の奥がつんとした。やばいなと思ったそばからぼろぼろと涙がこぼれる。泣くなよ、と私のおでこをつんと指で押した麻奈の声も湿っぽい。顔を見合わせたらなんだかこっぴどくしくて、二人して鼻をすすってから笑った。

第5話-1 反省



あんなに厚く空を覆っていた灰色の雲が薄くなっている。東の空に、重たかった灰色とのコントラストがあまりに強烈な、鮮やかなオレンジ色がのぞいていた。

この光の変化が、逸子の心に投げた変化が少しだけ欲しいところです。仲直りできた、ほっとした、日傘が必要な忌むべき陽光が……。
この物語は光とともに動いています。この重要な場面で、麻奈との関係を固めておきましょう。
そして、麻奈とはどう別れたのかも。

トートバッグの中に入れていた日傘を取り出し、オレンジ色に染まり始めた住宅街を駆けた。

――私がこれ以上怒る前に消えてよ！

自分の口から出たはずの言葉が、抜けない棘のように引っかかって自己嫌悪を膨らませていく。焦燥感にも似た後悔が、私をこれでもかと走らせる。

中学校の近くまで来て足を止めた。グラウンドのかけ声や、バットが球を打つ音、そしてかすかに吹奏楽部の管楽器の音が届いてきた。ここに学校をサボった三谷野がいるとは思えず、さらに走る。

いつもの帰り道を途中で曲がり、石ブロックの塀沿いに行くと高層マンションが見え、『三谷野』という表札がかかった門柱を見つけた。どくんと大きく全身の血管が波打つ。瓦屋根の、二階建ての一軒家。ベージュ色の外壁は、年季が入ってところどころ色がまだらになっている。門柱のすぐ隣にはトタン屋根の駐車場があったが、車は停まっていなかった。濃い

青のマウンテンバイクだけがぼつねんと隅の方に停められていて、油性ペンで書かれた『三谷野武』の角ばった文字が自己主張している。

日傘を持った左手の甲で流れ落ちる汗を拭って、おそるおそる、インターフォンを押してみた。数秒待ったが、誰も出なかった。

三谷野の家の前から一步あらずさり、走ってきた住宅街を振り返った。行くあてはもうない。上がった呼吸がなかなか落ち着かず、体力的にも限界が近かった。貧弱な自分が泣けそうなくらい情けない。

湧

どちらかだけにする方がいいと思います。

再び走りだす気力も体力も湧かなくて、とぼとぼと住宅街を抜けた。住宅密集地を抜けると視界が広がり、隣の市との境界になっている川沿いの土手に出る。そこから見下ろせる背の低い雑草で覆われた河川敷は、一年を通して小学生の遊び場になっていた。アスファルトの土手から河川敷に下りられる階段のわきは背の高い木が数本植えられていて、中でも特に大きく太い桜の木の下は夕方になると日影になる、私に優しい場所だった。河川敷や川にかけられた橋など辺り一帯が見渡せるのもお気に入りの理由だ。そういえば、昨日もここに来ようかと思っていたんだっけ。

?

少し休むだけのつもりで向かったそこに、川面を静かに見下ろしている三谷野が座っていた。立てた片膝を両腕で抱え、そこに顔を埋めている。思いもかけない三谷野の姿はなんだか現実感に乏しかった。

何を?

駆けだして確認したい衝動をこらえ、ゆっくりと、一段一段確かめるように階段を下り、近づいた。

その名を呼ぶと、三谷野はゆっくりと顔を上げた。その表情は疲れたように覇気がなく、別れたときのまま顔色はよくない。

その、と言ってから言葉を探した。考えて、一番訊きたかったことを訊いた。

「あのキーホルダーが麻奈のものだって知ってたの？」

第5話-2 知らなかったこと



「日影、入りなよ」

いちばん女子きな部分です。

三谷野はすっと立ち上がり、自分が座っていた木の根元を私に譲った。ほんの少しためらったが、促されるまま日傘を畳んで木の幹にもたれかかった。そうすることが正しいように思えた。背中に当たるごつごつした木の幹はひんやりしていて、その冷たさがくたくただった体に気持ちよくなりていく。

三谷野はステップを踏むように木影から出た。夕日に照らされ、その体が黄金色に輝いて見えた。

三谷野が長いこと放っておいたように感じます。思ってたんだ、でいいと思いますよ。

「はじめは、逸子のキーホルダーだと思**って**たんだ」

でも、キーホルダーを見てるときの逸子の様子がおかしかったから、笹原麻奈のだってわかった。

「実は、逸子がキーホルダーを見つける前に、俺、笹原が何かを探してるのを見ててさ。それで、逸子から笹原にキーホルダーを返したらいいんじゃないかなと思って」

「なんでお揃いのキーホルダーのこと、知ってたの？」

そんなの。三谷野は意外でもなんでもない、と言うように私を見る。

「逸子のバッグについてたの、見てたからに決まってるじゃん。まあ、最近の外してたみたいだけど」

返す言葉をとっさに見つけれなかった。人のキーホルダーを覚えているなんて.....物好きにもほどがありすぎる。

気づいたら顔が熱くなっている自分に目を見開いた。ぱっと視線を上げたら三谷野と目が合ってしまった、記憶力いいんだね、なんて苦し紛れに褒めてみた私を、三谷野はからっと笑う。

「逸子のだから覚えてたに決まってるじゃん」

「とっさに」見つけれられないような端的な言葉が先に来る方がいいと思います。

それは教室では見たことがない、柔らかい笑顔だった。そこに嘘やからかいなどが含まれていないことくらい、ひねた私にだって理解できた。日に当たってしまったときのように頬がほてって、再び視線を落とした。雑草がまばらに生えた茶色い土をサンダルつま先で掘る。

わからないのだ。

いくら三谷野が私をからかっていないとわかったって、好かれる理由が皆目思い当たらない。

俺さ。三谷野は空を見上げた。ずっと、すごいなと思ってたんだ。

「逸子はさ、アレルギーのこと、誰になんて言われても、これが私なんだから文句ある？ って感じじゃん。自分は自分って、割り切ってるさ。なんつーの？ ひょうひょうとしてるっていうか。それがすごいなって」

そんなこと、ない。自制しなければ、そう言い返してしまうところだった。私は全然、強くない。強がっているだけで、いつだって引け目だらけで、本当はみんなのことが羨ましかった。妬ましかった。晴れた日にグラウンドを走り回ったり、水泳をやったり、マーチングをやったりしたかった。でも、そんなことを言っただけで、しょうがないものはしょうがない。自分の言葉に傷つくのは自分だ。だから諦めた。自分は自分がいられる場所にいるしかない、そう割り切って、諦めて、なんてことないって風にすることでしか、自分を守れなかった。

「すごいなって思い始めてから、なんとなく、逸子のこと観察するようになったんだ。そうしたら、いつも一緒にいるグループの子たちよりも、笠原麻奈の方に気を許しているように見えてさ。なんでなのかなって思ってたなら、笠原は、『夏子』じゃなくて『逸子』って呼んでるってことに気がついたんだ」

それに気づいたときさ。言葉を切った三谷野に顔を上げたら、まっすぐな視線とかち合った。俺、わかったんだ。

「本当は、逸子だって人並みに気にしてるんだなって。『夏子』ってあだ名で呼ばれるの、本当は嫌なんだなって」

そう思ったら、なんか、思っちゃったんだ。

「逸子も、普通の女の子なんだって」

手を入れたところでも、この流れはくずさないで！ 本当は

いい流れです。

体の中で、何重にもかた結びをしてしまった糸の塊がお湯につかってふっとほぐれ、色鮮やかな文様を広げたようだった。世界が心なしか気づいて見え、気づけば動悸まで早くなっていて、喉がつかえたように苦しい。

どうして私は今まで、三谷野の視線に気づかなかったんだろう。

どうして私は今まで、三谷野を見なかったんだろう。

どうして私は今まで、三谷野を知らなかったんだろう。

自分から世界に線を引き、余計なものを見ないように毎日を過ごしてきた。そんな自分が初めて悔やまれた。

揺らぐことのない三谷野の視線に負けた。足元に視線を落とし、あの、と小さな声をなんとか絞り出した。

「明日……一緒にお祭りに行ったら、教えてくれる？　なんで、似た者同士なのか」

返事がなくて、顔を上げると。困った顔で私を見ている三谷野がいた。――ああ、そうだった。温かかった気持ちはたちまち重たく沈み、さっきとは別の感情で息苦しくなった。消えちゃえとか言ったのは、私だったんだ。

思いもかけずじわっと目元が熱くなってしまう、顔を伏せて勢いよくぱんっと手を合わせた。ごめん。

「今の、訊かなかったことにして」

すると、三谷野は慌てて両手を振った。

「違う違う違う！　ちょっと驚いただけ。……その」

自らの頬を指でかいて、三谷野は視線を斜め上にした。

なくてもわかりますっ ないすかい。いい。

「すっげー、嬉しい」

俺は。三谷野は私をまっすぐに見返した。

「何があっても、本当に、逸子と祭りに行きたいと思ってたから」

明日 五時半に陸橋の下で待ち合わせな。こくと頷いた私に、三谷野は勢いよく天に向かって拳を突き上げた。

カクニン！

第6話-1 見送り

この第6話-1、指摘すべきところはありません。



雲一つない晴天、とはいかなかったけど、白い雲がうっすらと浮かぶ、気持ちの良い天気だった。

午前中、私は麻奈の見送りに行った。

「わざわざよかったのに」

引越し屋の作業員が、トラックに力強く段ボールを運び入れていた。私と麻奈は、日影になっているマンションの駐輪場で、石ブロックに並んで腰かけた。

何かあげられればよかったんだけど。私は持ってきていたトートバッグから、自分のくまのキーホルダーを取り出した。

「もしよかったら、麻奈のキーホルダーと交換しない？」

麻奈はさっと私の手の中にあったキーホルダーを掴み、にっと歯を見せた。

「実は、私も同じことを考えてたんだ」

着ていたパーカーのポケットから、麻奈もくまを取り出した。私の手に自分のキーホルダーをぎゅっと握らせる。二つの

手のひらにそれぞれ乗った二つのくまを並べると、同じキーホルダーのはずなのに、ちょっとだけ顔が違うのがわかる。

麻奈一、と母親が呼ぶ声が聞こえた。すぐ行く！ と麻奈は返事をする。

「こっちに来るときには、絶対にメールする」

「来る用事がなくても、いつでもメールして」

OK！ 麻奈はぐっと親指を立てた。

たんつと足を鳴らして石ブロックから立ち上がり、麻奈はぱんぱんつとショートパンツをはいた。それにしても。夏祭りに行けないのだけが、残念だよなあ。

「逸子は、今年は誰かと行くの？」

小さく頷いた。それから、手を当てて声をひそめた。ここだけの秘密だけど。

「え、嘘、なんで三谷野と行くの？」

へへと笑んだ。まあ、色々あって。

もう一度、麻奈を呼ぶ声がした。詳しくはメールで教えなさいよ！ そう私を小突いて、麻奈は手のひらを私に向けた。じゃあ、またね。向けられた手のひらに、右手を勢いよく重ねた。ぱあんつと乾いた音が青い空に溶ける。夏はまだ始まったばかりだ。

第6話-2 待ち合わせ





浴衣を着るのは三年ぶりだった。

小学生の時に着ていた浴衣は丈がすっかり短くなってしまっていて、お母さんが若い頃に着ていたという浴衣を借りた。

満点の星空のように明るい紺色の地に、弾けた花火のような大輪の花が咲いている。薄黄色の帯をしめてもらったら、なんだか急に大人に近づいたような気がした。

満天

「もっと暗くなってから出かけたら？」

玄関で下駄を履きながら、大丈夫、とお母さんに答えた。すぐに暗くなるよ。

下駄箱の上に置いていた、白い花卉が散った赤布のきんちゃく袋を手を取った。小さな鈴が、ちりと鳴る。

「雲が出てお日様も強くないし、日傘もあるし」

行ってきます、と家を出た。

履き慣れない下駄のかこんかこんという不規則な音が、はやる鼓動に拍車をかけた。日傘をさした浴衣の影が、アスファルトの地面に落ちている。午後六時前はまだまだ日が高く、伸びる日傘と浴衣の影は大人の女性のもののようだった。もちろん、影だけじゃなくて、浴衣の紺色と日傘の黒色の組み合わせも悪くない。くるくるっと日傘を回し、和風メリーポピンズ、なんちゃって。今にも鼻歌が出そうになっている自分に気づいて自重した。

歩いていると、祭りに向かっている親子連れやカップルの流れに混ざった。神社に近づくにつれ、人の数は増えていく。期待に満ちた楽しい空気に、なんの抵抗もなく染まってしまう。祭り独特の、活気のある出店の呼び込みや笛や太鼓の音が、早くも耳の奥で聞こえていた。

待ち合わせ場所になっていた陸橋は、私の家と神社のちょうど中間地点にあった。アスファルトの太い支柱の影に移動し、ふうっと日傘を閉じる。あまりきょろきょろするのもなんなのでゆっくりと辺りを見回したが、三谷野の姿は見えなかった。きんちゃくの中にしまっている携帯電話の時計を見る。午後五時二十九分。

きんちゃくを両手で持って、つま先を揃えて立った。浴衣のせいで、普段よりおしとやかになった気がする。気合いを入れ過ぎだと思われたらどうしようなんて、にわかにな不安を覚えて落ち着かない。途端に頬が熱を持ち、顔中の神経を使って必死に平静を呼び戻す。全身を血が巡る音がする。一人で何やってるんだろうなんて思ったら、再び顔が熱くなって口元を押さえた。完全にやられている。

陸橋の上を走る車のエンジン音と神社へ向かう人の話し声が、次々と私を通過していく。私を舞い上がらせていた熱は徐々に冷静さを取り戻し、しまいには胃が痛み始めた。

.....遅い。

何度もそうしたように携帯電話の時計を見ると、もう六時二分前になっている。もうすぐ三十分の遅刻だ。三谷野は一向に現れない。

緊張はとっくにピークを越えていて、気持ちはどんどん落ちていく。やっぱりからかわれていたのかも。なんて悲しくなってから、昨日の三谷野の顔を思い出して考えを打ち消した。悲観的になるのはよくない癖だ。

昨日、三谷野は去り際に私のメールアドレスを訊いていった。携帯電話を忘れたとかで、私が口頭で教えたアドレスを必死に復唱して覚えていた。もしかしたら何かあって、でも覚えたメールアドレスが間違っていてメールが送れない、とかか

五時過ぎの～では？ 待ち合わせは17:30ですし、
18:00をきざしさせない方がいいと思いました。

も。

そのとき、ふいに三谷野の昨日の言葉が脳裏によみがえった。

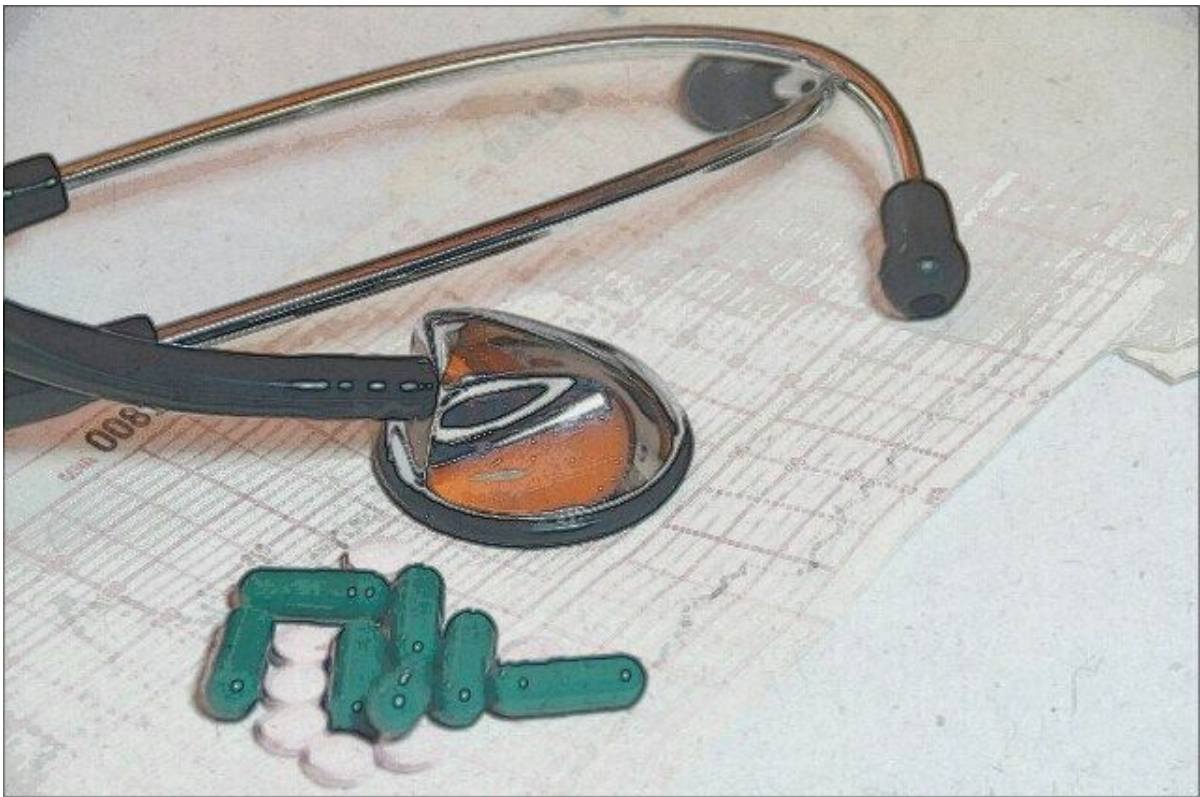
――何があっても、本当に、逸子と祭りに行きたいと思ってたから。

なんだか違和感があった。その言葉を口の中で二回繰り返し、その正体に気づいた。

なんで。なんであのとき、三谷野は過去形で話したんだ？

三谷野の言葉は、時制が過去のもの、とは言い切れません。
それよりも、果たせなかった約束の話をしているように感じられます。

第6話-3 おととい



じわじわと、言葉にならない不安が胃の奥からせり上がってきた。のどが圧迫されたように息がつまる。血管がどくどくと動いて、何かの警鐘が聞こえたような気がした。

日傘をさして、来た道を戻った。途中で角を折れ、三谷野の家へ向かう。

三谷野の家は、昨日とまったく同じ状態に見えた。車はなく、濃青色のマウンテンバイクが停まっている。二階を見上げるが、窓にはきっちりとカーテンが閉められていた。家の正面から少し移動して庭の方ものぞいてみたが、こちらもカーテンが引かれていて人の気配がない。

門の前に戻り、そっと指を伸ばしてインターフォンを押そうとしたそのとき。

「武くんのお友だち？」

背後から声をかけられた。私のお母さんと同じくらいの、にんじんやらネギやらがつまったスーパーの袋を腕に下げた、いかにも主婦らしきおばさんが立っていた。まじまじと見てしまってから、慌てて一つ頷いた。

「おうちには、誰もいらっしゃらないと思うわよ」

おばさんは少し視線を泳がせ、学校には言っていないのかしら、と呟いた。

「武くんね——」

走ると、下駄はあまりにうるさかった。ちょっとした段差で何度も脱げそうになって、その度に舌打ちをし、あまりのもどかしさで視界が歪んで溢れ出そうなものを飲み込む羽目になった。手にしたきんちゃくはぶんぶんと腰の下で振れて、小さな鈴がちりんちりん和小うるさく私を急き立て、焦燥感ばかりがむくむくと膨れて破裂してしまいそうだった。

——武くんね、アレルギーの発作起こして入院してるのよ。だいぶ症状が悪いつて聞いたけど。運ばれたの、おとといの夜だったかな。

教えてくれたおばさんの台詞が、何度も何度も頭の中でぐるぐると回った。アレルギー。発作。入院。でも、それより何より。

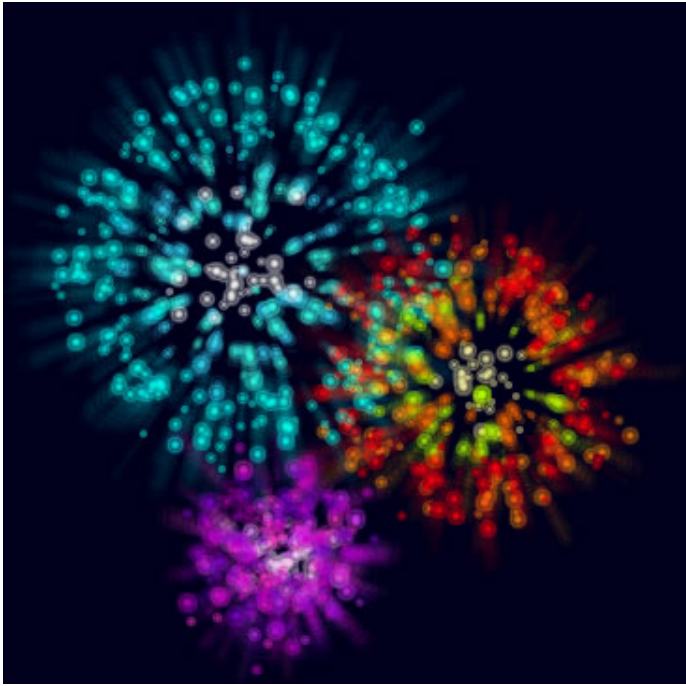
『おととい』って、何？

駅から徒歩五分のところにある、大きな総合病院。自動のガラス扉が開くのももどかしく、消毒液の匂いが漂う真っ白な病院に飛び込んだ。冷房のきいた空気がほてった体を瞬時に包み、吹き抜けのロビーに下駄の音がからんと響いた。着いた。そう思った途端に力が抜け、近くの壁に手をついてぜえぜえと肩で息をした。視線を落とすと、履き慣れていない下駄の鼻緒で親指のつけ根が赤くなっていた。今さら痛みを感じるなんて。流れ落ちる汗もそのままに顔を上げると、待合ロビーにいた患者や看護婦さんの視線が一斉にこちらに向けられていた。

上がった呼吸もそのままに首を巡らせた。『総合受付』というプレートをロビーの奥に見つけ、再び走りだす。受付のカウンターに、しがみつくように手をついた。

「三谷野武の病室を教えてください！」

第6話-4 花火



『三谷野武』

手書きでそう書かれたプレートが貼ってある病室の前で立ち止まった。内科病棟の個室だった。ぴっちりと閉まったスライド式のドアを、そっとノックする。

はい。若い女性の声が返ってきた。大きく深呼吸をして、失礼します、とそっとドアを開けた。

冷房の風で、白いカーテンが小さく揺れていた。何も置かれていない茶色い棚に、畳まれたパイプ椅子、そして病室の中央には、ナースコールのコードが伸びるベッドがあり、白いブランケットをかぶって横たわっている人がいた。入り口から顔は見えなかったが、ブランケットの上に出た小麦色の腕には見覚えがあった。

二十歳ぐらいの若い女の人が丸椅子に座っていた。その手には、携帯電話。

「もしかして、逸子ちゃん？」

携帯電話を手にした女性の、明るい性格をうかがわせる丸い目がくりっと動いた。それは、三谷野にそっくりだった。

「よかったわ、メール打つ手間がなくなって」
三谷野のセリフに見えます。役割語になってしまいますが、よかったわ、とすると誤解は消えます。

女性は立ち上がり、どうぞどうぞ、となんだか嬉しそうに私を手招いた。

「こいつさ、今朝意識を取り戻したばかりだってのに、『逸子にメールを出せ』って怒鳴りやがって。おかげで具合悪くなってこのザマ」

おそろおそろベッドに近づいた。点滴のチューブが布団の隅から伸びていた。あごの下まで薄手のブランケットをかけら

三谷野の告白に、幽体離脱という言葉を入れないことをオススメします。
昨日、彼がどうだったのか、三谷野自身の口から語らせてしまうと、ちょっと安っぽく感じます。逸子が「幽体離脱.....なのかな？」ぐらいの受け止め方をする程度にとどめておけば、少女と少年の見た真夏の夢として物語が閉じていきます。
今のままでは、突然のオカルト解決ですから今時の感覚では読後感を相当に変えてしまいます。

れた三谷野は、見たこともないくらい青白く、なのに頬はおたふく風邪にかかったように赤く腫れていて、唇も白く乾燥していた。

かける言葉を失っていると、三谷野はゆっくりと目を開き、その唇に笑みを浮かべた。それは昨日と同じ、あの柔らかな笑みだった。

私に自分が座っていた椅子をすすめ、おじやま虫は出て行くわね、とどうやら三谷野の姉らしきその人物は携帯電話を置いて病室を出ていった。携帯電話の画面には、作成途中のメールが表示されたままになっている。

『色々あって今日は行けなくなっただけど、言ったことは嘘じゃないから』

俺さ。かすれたその声に顔を上げた。三谷野はゆっくりとまばたきすると、天井を見つめた。

「アレルギーなんだ。結構重度の、雨アレルギー」

いわゆる酸性雨ってやつに触れると、症状が出ちゃうんだよね。

その言葉に、シャツを濡らし、降りだした雨の中、走り去っていく三谷野の姿を思い出した。

「まさか.....おとといの雨で？」

自分のために常備していた折りたたみ傘を、私に渡してしまったせいで。なのに私はそれを使いもしなかった。

「あんなに雨が強くなるなんて、思ってもみなくてさあ.....」

万年晴れ男の三谷野。でも、そうじゃなかった。単に、三谷野は晴れた日にしか、学校に行けなかったのだ。それは、私が『夏子』と呼ばれていることにとてもよく似ていた。ただ、三谷野は周囲にそのことを言わず、そのせいで不良だのなんだのと変な噂が立ってしまった。

「信じてくれるかわからないけど。昨日の朝になってみたら、幽体離脱状態だったんだ。とりあえず学校に行ったんだけど、誰も俺に気づいてくれなくてさ。こりゃ死んだなって思った。でもそのとき、逸子だけが気づいてくれた」

あの、キーホルダーを拾ったときのことだ。だから、あんなに驚いていたんだ。

「神様が、最期に時間をくれたんだと思った。だったら、逸子のためにできることをやりたいなって」

とか、語ってみたけど。これ、全部夢だったらどうしよう。

ブランケットの上に出ている三谷野の手にそっと触れた。夢じゃないと思うよ。一度言っただけじゃ物足りなくて、もう一度言った。夢じゃないよ。

「三谷野のおかげで、私、麻奈と仲直りできたもん」

昨日、言えなかった言葉があった。

「ありがとう」

少し驚いたように目を見開いた三谷野は、穏やかな表情でまぶたを閉じた。

「もう大往生した気分」

「夏祭りには行けなかったのに？」

そうだった。三谷野はゆっくりと目だけでこちらを見た。

「でも、逸子の浴衣が見られたからよかったかも」

弱々しくはあったが、すっかり見慣れたにやっとした笑みを浮かべる。

そのとき、窓ガラスを震わせる、腹の底まで響く短い破裂音がした。

花火だ。

ドンっと一つ、続けて三つ。パチパチと火花が弾ける小さな音も聞こえている。

「窓際に立てば、花火、見られると思うよ」

横になったままの三谷野の言葉に、私は首を振った。

「今年は音だけでいい」

その方がフェアだよ。私のその言葉に、三谷野は耳をすませるように静かにまぶたを閉じた。

夜空に打ち上がる花火の音が、心地よく鼓膜を揺らす。しばらくすると、それにまぎれて静かな寝息が聞こえてきた。夏も悪くないなあなんて、思ってみたりして。

「来年は、一緒にお祭りに行こう」

来年の今日が、雨でも晴れでもさ。

三谷野の寝息がほんの少し乱れて、私は小さく笑った。

〈完〉